



今月の特集

土台を築く年、「丑年」

新たな常識・習慣が浸透する1年に



今年は「辛丑」

2021年の干支は、丑年です。そこで、丑年にまつわるエピソードや過去にあった出来事、そして丑年である今年には何が起こるかを見ていきたいと思います。

新年で親戚や友人など多くの人と顔を合わせる機会が多い時期に、話のネタとして役立ててみてくださいね。



「丑年」は、十二支のうち、2番目に位置します。そして、干支は「子・丑・寅……」の十二支と「甲・乙・丙……」から成り立つ「十干」を組み合わせたものです。丑年の場合、丑と「十干」である「乙」「丁」「己」「辛」「癸」を組み合わせた「乙丑」「丁丑」「己丑」「辛丑」「癸丑」の5種類があります。60年かけて5種類の丑年が一周するのですが、今年は「辛丑」にあたります。

これは中国をはじめとしたアジア圏に伝わる「陰陽五行説」という考え方で、方角や年月を示すほか、占いとしても用いられます。丑は本来「紐」を指していて、芽が種子の中で眠り伸びることができない状態を意味し、辛は植物が枯れた状態を指します。こう書くと「辛丑」にネガティブな印象を抱いてしまいますが辛丑という組み合わせは「相生」と呼ばれ、互いの強みを生かし合い、新しい生命が芽吹くという意味合いを持ち、枯れて衰退した分だけ、新たな成長が見込める年と前向きな意味があります。

干支としての「牛」は、動物たちが神様への挨拶をしにいき、その順番で十二支の順序が決まったという有名な十二支神話。この神話で、一番初めに出發したにも関わらず、ネズミに利用されて2番目になった動物が牛です。このような伝説から見ても、牛には「マイペース」や「おっとり」というイメージが強く、さらに「騙されやすい」や「間抜け」という印象を持たれがちという

ことが分かります。しかし「自分は足が遅いから」とどの動物よりも早く出發したのも牛であり、思慮深く、きつちりと計画を立ててから行動する動物でもあるのです。

様々な情報が流れ、飛び交い、なにかとせかせかしがちな現代。牛のようにゆったりと構え、落ち着いて生きていきたいものですね。

過去の丑年には どんなことがあった？

今まで「丑年」には様々な出来事が起こりました。中でも、2009年新型インフルエンザの大感染は記憶に新しいのではないのでしょうか。

メキシコとアメリカで確認されたウイルスは、瞬く間に世界中へと拡散。日本でも5月、カナダからアメリカ経由で帰国した高校生ら3人の感染が確認されたのを皮切りに、急速で感染が広まりました。この間くと、昨年より猛威をふるった新型コロナウイルスを思い出す人も多いでしょう。その後、新型インフ

ルエンザは医療機関や保健所の尽力もあり終息。現在は季節性のインフルエンザとして扱われています。

一時は恐れられたインフルエンザですが、前年に比べて患者数は99.7%も減少。奇しくも新型コロナウイルスの流行により、感染対策に力を入れる人が増えたためと見られています。ちょうど12年前に流行したインフルエンザのように終息する日もそう遠くは無いのかもしれませんが、

また、もつと古く丑年には、どのような事件や歴史があったのでしょうか？ 当時にあった出来事が、今も受け継がれ現在の土台になっている例も。今度は、そんな過去の出来事を紹介したいと思います。

1853年にはペリーが日本に訪れました。長く鎖国を行っていた日本人に衝撃を与えた「黒船来航」をきっかけに江戸幕府の権力は失墜、各地からの反発が激化することに。この出来





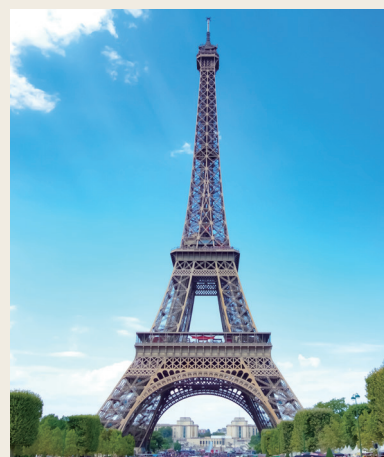
事が無ければ、今の日本の歴史も大きく変わっていたかもしれません。

1925年には、日本放送協会がラジオ放送。さらに日本相撲協会、東京六大学野球が開始しました。また、東京で京王線と山手線が操業を開始するなど、今も日本を支える文化やインフラが整備され始めた時期と言えるでしょう。



日本以外に目を向けてみましょう。

アメリカでは1865年に「南北戦争」が終戦。世界でリーダーシップを取るアメリカが、大国として初めて成立した瞬間でもあります。奴隷制度が撤廃されるなど、歴史的に見



ても大きな変動があった年にもなりました。

1889年にフランスでは「パリ万博博覧会」が開催。開催に合わせて建設された「エッフェル塔」は当時では世界最大の高さを誇り、日本の「東京タワー」のデザインにも影響を及ぼしました。このように、過去の丑年には、今の世の中にも大きく影響するような出来事が起こっています。

大きな変化を 定着させる1年に

さて、2021年の丑年には、どのような出来事が起きるのでしょうか？前年は、新型コロナウイルスの

影響に伴い、生活様式が大きく変わる1年となりました。2021年はそんな変化がより浸透し「新たな常識」として定着するのでは。

有名な例でいうと「リモートワーク」や「テレワーク」など、これまで当たり前だった、決まった時間に「電車や車に乗り会社に通う」という形式ではなく、通話やチャットツールを使い、自宅で仕事をするというスタイル。全ての勤務をリモートに切り替える企業もあれば、週に数日は出社する企業もあるなど形態は様々ですが、リモートワークが主



流になるのもそう遠くはない未来かもしれません。

リモートワークの普及に伴い、「オフィス」の意味合いも変わりつつあります。ベンチャー企業を中心に、東京に置いていた本社を地方に移転する事例も増加。行政サービスがオンライン上で進められる「行政デジタル化」も推進されています。政治や経済、人口が東京に集中する「東京一極集中」が解消され、地方が活性化する可能性も、現実味を帯びてきたのでは。

過去の大きな変革などで、歴史を揺るがす出来事があった「丑年」。

今年の丑年も、これまでの常識を覆すような新たなルールや習慣が定着していくことが予想できます。「種子の中で眠る芽」のような意味合いを持つ丑年では、未来に向けての土台を築く1年にしていきたいものです。（了）

